

本県洋風建築のさきがけ  
堀江佐吉 ほりえ さきち

弘前市親方町の青森銀行弘前支店構内に、重要文化財「青森銀行記念館」が建っている。一九七二年（昭和四十七）五月十五日、明治期におけるすぐれた洋風建築物として、文部省から指定されたものである。建物はいまなお華麗な建築美と威容を示していて、見学に訪れる人たちが絶えない。

この建物は、一九〇四年（明治三十七）に第五十九銀行本店として、弘前市の棟梁堀江佐吉が設計施工して建築したものである。ルネッサンス風の様式スタイルで、随所に堀江佐吉の独創的な工夫が凝らされており、構造的にも技術的にもきわめて高い水準のものといわれている。

この建物については、「気品ある白亜の殿堂、美しい明治期の建築。」「宏壮にして虚飾を排し、堅牢にして疎略に随せず。」と賛えられているとおり、当時の銀行店舗としては、斬新な意匠を施した近代的様式というのが、建築家たちの一致した評価になっている。

さて、重要文化財「青森銀行記念館」などの傑作を後世に残した堀江佐吉について、弘前の郷土史家中村良之進は、その著書『弘前寺院縁起志』に次のように記している。

大工棟梁堀江佐吉、祖先は大阪にて難波の堀江に居り代々名匠の家なりと。父を伊兵衛という。佐吉は弘化二年（一八四五）を以て当地

に生まる。性剛胆にして無欲なり。工匠として技倆非凡なるは先天的に出ず。棟梁の材を有し、常に義侠心を以て、数百の部下を統率せしを以て家に旦夕の貯えなしといえども、信用を失いたることなく、本県下の大建築はあげてその手に就かざるはなし。弘前匠工会総裁並びに弘前大工組合会頭取にあげられ、誠意を以て事務に当たれり。特に日露戦勝記念として、齋藤主、石戸谷末九郎らの有志とはかり、弘前図書館の建物を新築して寄付せしがごときは、公共事業に貢献したる一例なり。明治四十年（一九〇七）八月十八日没す。行年六十二。葬式甚だ盛んなりし。後日関係者相図り旧大円寺に巨大なる碑石を建てたり。

堀江佐吉は一八四五年（弘化二）二月三日、父伊兵衛の長男として、弘前覚仙町三十九番屋敷で生まれた。堀江家は代々が大工を業としていた。祖父の佐兵衛も父の伊兵衛とともに腕のたつ大工であったが、その血筋をひいて佐吉もまたすぐれた才能の持ち主であった。

佐吉は幼少のころから頭がよく、また勉強も熱心だった。『ここに人ありき』の著者船水清氏は、佐吉の少年時代の勉強ぶりについて、「佐吉が若年のころ学んだという本が、いまも堀江家やその親戚の家に保存されているが、そのなかで弘前市古堀新割町堀江志郎家にある『海外余話』（酔夢痴人著、全五冊本、嘉永四年（一八五二）刊）の写本が、佐吉の勉強ぶりを裏づけている。この本は名前のとおり、当時の海外事情を記した木版刷り絵入り本であるが、佐吉は絵も含めて全文を克明に写しとって一冊にまとめ、最後の頁に「安政六年二月に写す佐吉く

と自署している。安政六年（一八五九）は佐吉十五歳の時である。本の内容は阿片戦争（一八四〇～四二）などが記してあり、イギリス女王が家来たちを集めて清国（中国）への謀議をはかっている絵などがあるが、その絵をじつに描写して、少年佐吉が海外の事情に対して深い関心と、強い知識欲に燃えてこれを吸収することに努めたことを、雄弁に物語っている。それと同時に佐吉がなみなみならぬ画才の持ち主であること、また文字もなかなか達者であったことをはっきり示しているのである。」と書いている。本の挿し絵まで書き写す佐吉の努力は、彼の旺盛な知識欲を示して余すところがない。

大工の家に生まれた佐吉は、そのような環境のなかで、大工の基礎的な勉強に励んだ。佐吉が勉強したと思われる和綴本のなかに『番匠町雛形』（明和七年版、浪華十一堂広岡保教著）、『新選早引、匠家雛形之編』（本林常将著）、『大工初心図解初篇』（猿田長司著）、『匠家雛形増補初心伝』（甲斐国石川七郎左衛著）など当時の専門書が残っていて、それらの挿図にはそれを応用したと思われる朱線が随所に見られ、如何に佐吉が研究努力したかが、うかがわれる。

弘前市新寺町の専徳寺本堂外陣欄間にある龍の彫り物は、佐吉の制作といわれている。佐吉十六歳の時というが、見事な出来栄で、とても十六歳の少年の作とは思われない。専徳寺は佐吉の父伊兵衛が一八六〇年（万延元）から二年がかりで建てた伽藍だが、その外陣欄間を息子の佐吉が初仕事として、立派な彫り物で飾ったのである。親子協力の姿も美しいが、父伊兵衛にとっては息子の腕の確かさが何よりうれし

かったのではあるまいか。この他に岩木山神社の玉垣の装飾も佐吉十六歳の時の作と伝えられている。父伊兵衛も建築のほかにも彫刻にすぐれていたというから、実地の仕事は父に学んで、佐吉は腕を磨いたものであろう。

佐吉は一八七一年（明治四）三月二十五日に母を亡くし、つづいて四月七日に祖父佐兵衛を失った。その時の堀江一家は戸主伊兵衛五十五歳、伊兵衛の母もと七十五歳、長男佐吉二十七歳、三男豊吉十五歳、佐吉の妻さた二十四歳、佐吉の長男彦三郎六歳、同二男柁吉四歳、同三男竹次郎一歳の八人家族であった。佐吉は一家の支柱として家族を養う立場にあった。

ちようどその年の九月、県庁が弘前から青森に移され、県名も弘前県から青森県に変わった。県では青森の旧御飯屋おかりやを県庁として事務をとるようになったが、新しく着任する職員の官舎がなかった。そこで翌年春早々官舎を新築することになったが、それを聞き込んだ請負業者たちは、遠くは仙台、盛岡あたりからも仕事を手に入れようと続々青森に乗り込んで来た。それを聞いた地元弘前の業者たちも、黙ってはいられないと、競争意識を燃やして青森に乗り込んだ。その中に若い堀江佐吉もいたのである。

新築する官舎には一号、二号と番号がつけられて各組が分担し、弘前組も七、八棟を請け負うことになった。ところが他県の業者は棟梁の下に何係というふう組織ができていて、一糸乱れぬ仕事ぶりであるのに、弘前組はまとまりもなくばらばらだった。棟梁さえ決まっていな  
いので、仕事も始めることができない。しかも先輩の大工たちは、それぞれ自分が棟梁に指名されるものと思ひ込み、勝手放題さしずな指図をする

ので、いよいよ混乱するばかりである。

そのとき、工事監督の役人が弘前組一同を集めて「この組の棟梁を指名する。棟梁は堀江佐吉である。期日が迫っているので仕事は遅れないよう心掛けよ。」と命令した。みんなあつけにとられた。立派な先輩の大工が何人もいるのに、後輩の佐吉を選んで棟梁を命じたからである。だが役人は佐吉の人柄を見抜いて、年齢にこだわらず任命したものであった。

これは佐吉自身にも意外だった。佐吉は工事監督の役人に「弘前組のなかには立派な棟梁が何人もいる。私などまだ未熟者だから、変更していただきたい。」と辞退したが、役人は「この工事の責任者は自分である。自分の考えで君に決めたのだから、やっってもらうほかない。」と、いつて取り合わなかった。そこで佐吉も心を決めて皆にその旨を話し「若輩の私に協力してほしい。」と懇ろに頼んだ。

他の組ではもう仕事を進めているし、期日も限られているので、弘前組でも棟梁問題でこれ以上仕事を遅らせることはできない。そこで佐吉を棟梁に、みんなは力を合わせて頑張ることになった。弘前組の棟梁に指名された佐吉は「よろしく頼む。」と各組をまわって挨拶した。挨拶をすませて弘前組の小屋にもどると、佐吉は大工一同に「明日は柱立てをする。そのつもりでいてほしい。」と申し渡した。

このとき他の組では、すでに数日前から柱立ての準備を進めていたが、弘前組はまだ材木の荒削りさえできていなかった。それを明日は柱立てをするというのだから、みんな驚いた。だが、佐吉はいつこう平気で、そのまま小屋を出ていくと、隣りの組の棟梁に会い、「あなたの

組では何日ごろ柱立ての予定ですか。」と尋ねた。「もう五、六日してからやるつもりだ。」と答えると「それなら私たちの方にいままで作った一軒か二軒分の柱を貸していただけまいか。あなた方の柱立てまでには全部揃えてお返ししますから。うちの組では段取りが遅れているので、申し訳ないがご協力願います。」と懇ろに頼み込んだ。

佐吉は同じことを次の組にも言って頼んだ。他県から来た大工たちは弘前組の若い棟梁が頭を下げて丁寧ていねいに頼むので、みんな承諾した。佐吉は輩下の人夫たちに指図して、各組から借りた柱をただちに弘前組の作業場に運び込ませ、翌日まだ夜の明けきらぬうちに、借りた柱を使って柱立てをはじめた。そして一日のうちに弘前組が請け負った七、八軒分の官舎の柱立てを終わり、その余勢でどしどし仕事を進めた。柱を貸した各組の棟梁たちはこれを見て「うーむ、あの若者は大変な奴だ。これあ、やられたわい。」と、佐吉の仕事運びの機敏さに舌を巻いた。柱立てのときには工事監督から祝いの酒肴しゅこが出る。佐吉は各組の棟梁たちも招いて、「お陰様で遅れを取り戻すことができました。ありがとうございます。これからもよろしく願います。」と心をこめて挨拶をした。棟梁たちも口々にお祝いを述べて拍手をした。

柱立てが終わった翌日から、佐吉は組の仕事を二つにわけ、一方では建築工事を進め、一方では借りた材木を返す作業を急がせた。そして木取りした材木を、次々に返したので、各組の柱立てには少しも支障がなかった。しかもこれが契機で工事全体の協力体制もつくられた。そのため「弘前組の棟梁は年は若いがなかなかの出来物だ。」と評判が高くなり、他の組からも好意的な激励をうけて、工事はどんどん進んだ。

他県の請負師はもちろん弘前の先輩の大工たちも、佐吉の棟梁としての手腕力量に目を見張り、弘前の堀江佐吉の名は広く同業者の間に知られるようになった。

一八七四年（明治七）東津軽郡筒井村（現青森市）に兵営を建築することになり、翌年春から工事にかかって十一月に竣工した（この兵営には歩兵第五連隊第一大隊がはいる）。工事には佐吉も参加したが、兵営は当時として珍しい洋風木造の二階建であった。これがきっかけとなって佐吉は洋風建築に深い関心を抱くようになった。もともと知識欲が旺盛で、進取の気性に富む佐吉は、父の伊兵衛が江戸藩邸修理で江戸へ上った時、みやげに持ち帰った風俗画に描かれている洋風建築に興味を持ち、異国的なそれらの建物がどんな方法で建てられるのか、知りたいと思っていた。

ちやうどそのころ、佐吉が関心をもっていた洋風の建物が弘前にも初めて建てられたのである。一八七四年（明治七）弘前本町一丁目に建築された「赤格子館」がそれだった。これは蘭学者で医師の佐々木元俊が建てたもので、木造二階建、津軽地方では珍しかったガラス窓がつけられ、ペンキ塗であった。建築工事を担当したのは今常吉である。

今常吉は和徳町に住む旧士族だったが、廃藩後、禄を離れてから手職を身につけようと仙台に行き、西洋建築の技術を習得して弘前に帰った。今常吉の新知識を見込んだ佐々木元俊が、彼に依頼して建てたのが「赤格子館」だった。「赤格子館」は常吉にとって初めての仕事だっ

たが、弘前における洋風建築の最初でもあった。

佐吉は「赤格子館」の工事が始まると、毎日のように現場にでかけて、今常吉からいろいろなことを教わった。常吉もまた研究熱心な後輩のため、親切に教えたというが、その知識は佐吉が青森の兵宮建築のとき、大いに役立ったのである。

一八七九年（明治十二）六月、佐吉は開発ブームに賑わっている北海道に、新天地を求めて出稼ぎに行くことになった。一ケ年の期限付き契約で、明治新政府の北海道開拓使が行う、さまざまな工事に従事するためである。

初めて津軽海峡を渡り、函館の街々を見て佐吉は驚いた。いままで風俗画でしか見たことのなかった西洋建築が目の前に立ち並び、まるで異国に来た感じだったからである。当時、函館は横浜、長崎とともに我が国三大開港場として、アメリカ、ロシア、イギリス、オランダ、フランスなど各国の領事が駐在し、海外文化がどっと流れ込んでいた。そのころの函館には、西洋洗濯、西洋理髪、写真、西洋料理、牛乳、牛肉などの店があり、外国商品を並べた洋品店、学校、病院、日本最初の測候所、日本最初の鉄筋建築、西洋型船舶の造船所も開かれていた。函館の住民の生活も海外文化に影響されてハイカラでそのうえ港町独特の開放感にあふれ、弘前から出かけた佐吉はただただ目を見張るだけだった。

なかでも佐吉が大きな関心を抱いたのは、築島の外人居留地にある数多くの洋風建築であった。領事館や商館などが目を奪ったが、とくに



佐吉の魂をゆり動かし感動させたのは、一八六一年（文久元）に建てられたハリスト正教会の建築であった。また佐吉が渡道した一八七九年（明治十二）には、函館山の東山麓に新しく公園が造られていたが、これはイギリス領事ユースデンの発案になるもので、わが国で最も早く公開された公園の一つである。

研究心旺盛な佐吉にとって、函館はまさに知識の宝庫だった。彼は開拓使がやっている諸工事に従事しながら、暇をみてはこれらの建築物を見て回り、丹念に見取図を作つてその構造を研究した。また、工事に従事した大工や棟梁、左官たちを訪ねて設計図の写しをもらつたり、工事の苦心談なども詳しく聞いた。こうした基礎的な実地の勉強が、のちに佐吉を青森県における洋風建築の権威者にしたのである。

佐吉は北海道滞在中、暇さえあれば各地に見学に出かけて、新しい建築工法の参考資料を購入したが、これに稼いだ金のほとんどをあてた。そのため弘前にいる家族への仕送りも途絶えがちであった。こんなありさまだから、家族たちも大変困つた。佐吉は出稼ぎに出発する前にもらつた支度金を、当分の生活費として家に置いてきたが、半年余も仕送りをしないので、十人近い家族たちはその日の暮らしにも困り、近所の米屋からの借金がかさんで三百円余にもなつていた。佐吉も家族たちの苦労はわかつていたが、勉強に熱心なあまり、つい研究のために金を使ってしまうのである。

このように家族を犠牲にしてまで研究した建築土木の技法は、ただちに生かされる機会がやつてきた。一八八一年（明治十四）九月、明治

天皇の第二回東北ご巡幸のとき、県では天皇をお迎えするため、県内のお道筋の道路や橋梁きょうりょうの改修工事を行うことになった。だが日数が少ないため誰も引き受け手がなく、困った県では、「佐吉なら出来る。」と是が非でも頼んだ。義侠心の強い佐吉は、「命にかけても。」との仕事を引き受け、期日までに立派に橋を竣工させ、さすがは佐吉と皆をびつくりさせた。この工事のとき、北海道で体験した橋梁工事が大いに役立ち、佐吉の研究が無駄でなかったことを証明した。

こうして棟梁として名をあげた佐吉は、次々に立派な工事を完成させた。その代表的なものは、一八八五年（明治十八）に青森歩兵第五連隊内に第四旅団本部および官舎、一八八六年（同十九）東奥義塾校舎、一八八九年（同二十二）大倉喜八郎より依頼された北海道屯田兵舎とんでんべい二五〇戸、一八九一年（同二十四）には焼失した東奥義塾校舎再建築および宣教師館、その前後に弘前市役所、黒石尋常小学校、黒石尋常高等小学校、弘前大成尋常小学校、弘前警察署、青森県尋常中学校（現弘高前身）などを建築、一八九三年（同二十六）五所川原佐々木嘉太郎（屋号布嘉ぬのか）邸、一八九四年（同二十七）青森美以教会、一八九六年（同二十九）弘前第八師団司令部、騎兵第八連隊兵舎、衛戎病院えいじゆう、弘前偕行社、弘前城本丸の石垣崩壊の修復工事、更に一九〇四年（明治三十七）には第五十九銀行（現青森銀行記念館）や弘前図書館、七戸軍馬補充部兵舎および厩舎、七戸種馬牧場厩舎、七戸尋常小学校、藤崎尋常小学校などに枚挙に暇がない。だが一九〇六年（明治三十九）ごろから、佐吉の健康がすぐれず、佐吉が設計して施工は息子の斎藤伊三郎が当たった。その代表的な建物は、金木町の津島源右衛門邸（現斜陽館）や

弘前元寺町にあるメソジスト教会である。

以上は佐吉の手がけた代表的な建築物だが、その他にもさまざまな工事を担当しているから、まさに超人的な仕事ぶりだった。佐吉はどんな仕事をするときも、絶対手抜きをしなかった。それが彼の手がけた建築物に、はつきりと現れている。佐吉はすべて自分が納得するまで誠実に仕事を続けた人で、そのため損を蒙こうむることもしばしばだったという。

堀江組一統七百余人といわれ、県下一の棟梁だった堀江佐吉も病気には勝てなかった。一九〇六年（明治三十九）ころから健康が衰え、あらゆる手当てを尽くしたが一九〇七年（明治四十）八月十九日、家族や大勢の弟子たちに見守られながら、六十三年の生涯を静かに終えた。

翌朝の『弘前新聞』は次のようにその訃ふを報じた。

日本国中大工の棟梁として五本の指に数えられる堀江佐吉氏は、一兩年より身体衰弱せし故、断然禁酒して静養を加えしと元氣旺盛なる  
とに因よって、急激の変化なかりしが、当春より病勢ようやく重り、小野医学士主事医となり、伊東国手これを助力して、種々治療せしも薬  
石効なく、昨朝九時すぎついに死去せり、享年六十三歳

葬儀は八月二十六日、堀江家の菩提寺である新寺町専徳寺で行われたが、会葬者は千名を超え、弘前市でも稀まれに見る盛儀であった。葬儀に

は各界名士の参列をはじめ会社、団体から贈られた供花や弔旗などが数多くならんだ。会葬者もまた数が多いので、葬列の道順を変更するほどだった。しかし、盛大な葬列にもかかわらず、きゆう霊柩の先頭を行く霊旗には、ただ「大工佐吉之霊」とだけ書かれていた。

これは佐吉の遺言によるものだった。生前、佐吉は家族に「世の中の人たちは自分のことを、棟梁と呼んでくれるが、自分は棟梁などという柄がらではない。自分は大工の家に生まれ、生まれながらにしてチョウナ（手斧）の音を聞いて育った。ただよい大工になろうというのが自分の志だった。大工という職業に誇りをもって仕事をしてきたのだから死んで葬式を出すときも、旗に書くなら大工佐吉とだけ書いてくれ。そのほかのことはいらぬ。」と、話していたのである。この言葉からも佐吉の仕事に徹した心と、謙虚な人柄がしのばれる。

遺言通り、霊旗には「大工佐吉の霊」とだけ書かれた。書き手は生前佐吉が尊敬していた書家高山文堂が、白地に墨痕鮮やかにしたためたものだった。

佐吉の業績と人柄をたたえる記念碑は一九〇八年（明治四十二）七月二十一日、弘前市銅屋町最勝院境内に建てられた。碑石は高さ七メートル余、幅二・五メートル、厚さ三〇センチ余という巨大なもので「棟梁堀江佐吉翁記念碑」の文字が刻まれている。工学博士ふるいちきみ古市公威の揮毫きごうである。この記念碑は佐吉の友人や知人をはじめ市民たちのきよきん醸金によって建てられたもので、八百二十余名の有志から寄せられた。このことから佐吉の徳の高さがうかがわれるのである。

**参考文献** 船水 清『堀江佐吉』「ここに人ありき⑥」一九七四年（昭和四十九）陸奥新報社

**出典**：弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、二四～三六頁